

曳山人形外題解説

曳山名	人形場面	人形作者	囃子・踊り	人形場面	解説	責任者
1 川原町	巖流島 宮本武蔵 佐々木小次郎	広目屋	角館お山ばやし 扇栄会	今からちょうど一〇年前の一九一二年四月一三日 山口県下関市・彦島の東方にある船島(のちに巖流島に改名)での天下第一の剣豪の座をかけた一騎打ちの場 二刀流を生み出し六〇数度の決闘をして一度も負けたことがない剣豪宮本武蔵。 相対するは秘剣ツバメ返しの手、巖流佐々木小次郎。 この戦いには諸説あるが決闘の場で二時間も待たされた小次郎が鞘を捨てたことを己の敗北の予兆と指摘されるなどして頭に血が上り、冷静さを失ったところを武蔵に梶で額を割られたとされている。	竹内賢承 高野豊彦 渡邊克徳 辻瞬也	
2 北部	長篠の合戦 織田信長 武田勝頼	北部丁内 上松木内 若者	昇風会	天正三年五月二日、三河国長篠城をめぐる、三万八千人の織田信長・徳川家康連合軍と、一万五千人の武田勝頼の軍勢が戦った合戦である。兵力は織田・徳川連合軍がはるかに上回っていた。織田・徳川軍は武田軍の強力な騎馬隊に対して、三千丁ともいわれる鉄砲を駆使し、激闘の末、勝利を収めるのであった。	佐川陽介 武藤和也 金永大	
3 山根	黒塚 阿闍梨祐慶 安達ヶ原の鬼女	広目屋 徳月会	角館山本組	紀伊国東光坊の阿闍梨祐慶は、山伏らと修行の旅を続けていた。陸奥国に入った一行は、安達原で夕暮れを迎え一軒の家を訪ねると老女が居た。一夜の宿を頼み、みすばらしいからと断られたが何とか泊めてもらう。夜、女は焚火の薪を取りに山へ行くが、「決して自分の寢室を覗かないように」と言い残す。しかし言いつけを破り女の部屋を覗くと、死骸の山があった。女は、安達原の黒塚に住む鬼女と気づき慌てて逃げ出すと、鬼の本性を現した女が追いかけてきた。祐慶たちが必死で調伏の祈りを唱えると、その法力に負けた鬼女は弱り果て姿を消した。	草薨拓也 中村隆一 藤原翼 八柳健太	
4 横町	六条本圀寺合戦 細川藤孝 小笠原信定	横町若者	角館山本組	永禄一年(一五六八年)の年の瀬、織田信長は京都の安定を見計らい、六条本圀寺に足利義昭を残し本拠である美濃国岐阜城に一旦帰国していた。 翌年一月五日、小笠原信定は三好三人衆と共に、信長が不在であり義昭周辺の気の緩んでいるところを突いて本圀寺を襲撃したのである。 しかし義昭を弑することは叶わず。將軍の急を聞きつけ本圀寺に駆けつけた細川藤孝、明智光秀らと三人衆側軍は戦闘となる。	黒澤賢太郎 高村弘道 千葉太生 岡田光	
5 上新町	押戻 大館左馬五郎 清姫の霊	萬谷流 上新町 若者	おやまばやし 清友会	押戻とは、独特のいでたちの勇者が怨霊や妖怪の前に立ちふさがり、その行く手を阻むという役の総称、演技、演出のこと。「荒事」と呼ばれる、江戸の歌舞伎の特徴である荒々しい表現方法の一つ。 隈取をして、荒事の髪と衣裳を身に付け、高下駄を履き、竹の笠と太い青竹を持った勇者が、力強く勇ましく登場し、荒れ狂う怨霊や妖怪を花道から舞台奥に押し戻し、退散させる。	細川栄太 葉孔河 藤枝寛	
6 中央通り	桜井の別れ 楠木正成 楠木正行	広目屋	奏雅扇舞会	楠木正成は都に攻め上がってぐる足利氏の大軍を防ぐため死を覚悟して戦場に向かう。桜井の駅にさしかかった頃楠子正行を呼び「お前を故郷へ帰す」と告げた。「父上と共に」と懇願する正行に対し、「自分が討死した後を考え、帝のため身を惜しみ、忠義の心を失わず一人でも生き残り、必ず朝敵を滅せ」と論じ、形見として帝より下賜された菊水の紋が入った短刀を授け今生の別れを告げた。	高橋寿史 藤田賢史 山谷吉輝	
7 七日町	歌舞伎十八番 暫 鎌倉権五郎景政	小松	わらび座	舞台は鶴岡八幡宮。皇位へ即こうと目論む清原武衛が関白の宣下を受けるところ。そこへ加茂次郎義綱が許婚の柱の前たちを連れ立って奉納へ訪れる。加茂家をかねてから快く思っていない武衛は義綱に無理難題を浴びせる。 うんと言わぬ義綱に腹を立て、腹出したちに命じて義綱ら一同を斬り殺そうとする。まさに絶体絶命の瞬間、「暫く」と大きな声。二mを超える大太刀を差した鎌倉権五郎が現れ、さっそうと助ける。	荒木大輔 加藤寛幸 千葉博幸 佐藤秀典 根谷谷貴之	
8 西勝楽町	歌舞伎十八番の内 不破 不破伴左衛門 名古屋山三	文峰	秋月会	江戸吉原の大門口。深編笠の二人が出会う。一人は不破伴左衛門、あとの一人は名古屋山三だ。この二人は関白家の重宝剣の紛失詮議の役目を与えられ、流浪している身だ。 山三は吉原の傾城「葛城」と契りを交わした仲で廊に來ていた。これを見た、伴左衛門は刀の詮議も忘れて廊通いの山三に喧嘩をふっかけ、真剣を抜いて勝負しようとする。	井上健太 千葉拓也 羽根川裕 三浦耕輔	
9 本町通り	寿曾我対面 曾我五郎時致 工藤左衛門祐経	広目屋	神代芸能保存 嬉遊会	源頼朝の重臣工藤祐経は富士の巻狩りの総奉行を仰せつけられることとなり、工藤の屋敷では大名や遊女大磯の虎、化粧坂の少将が祝いに駆け付けている。そこへ朝比奈三郎が二人の若者を連れてくる。見れば、かつて工藤が討った河津三郎の忘れ形見、曾我十郎・五郎の兄弟であった。父の敵とはやる兄弟に工藤は「時節を待て」と言い、巻狩りの身分証明書である狩場の切手を兄弟に与え双方再会を期して別れる。	安藤雄介 大澤伸 戸澤和美 佐々木裕之	
10 駒通り	一谷嫩軍記 菟原の里林住家の段 平薩摩守忠度 岡部六弥太忠澄	広目屋 愁明会	会	平家の平薩摩守忠度は勇猛な武将であるとともに、藤原俊成に師事して歌をたしなむ歌人でもある。忠度は「ささ波や、志賀の都はあれにしを、昔ながらの山桜かな」という自作の歌が、俊成が撰者となって編纂している「千載和歌集」に加えられ、それによって歌の誉れを後世に残す事を生涯の望みとしたり。源義経は彼の心を汲み、忠度の名は伏せて「千載和歌集」にいれる事を俊成に許した。その旨を忠度に伝えるべく、詠歌の短歌も山桜の流し枝に結び、岡部六弥太忠澄にそれを届けさせる。岡部六弥太忠澄は菟原の里に忠度を訪ねて枝を渡し、戦場での再開を約束する。	堺信彦 齊藤政範 半田龍介	
11 駅前	義経千本桜 川連法眼館の場 源九郎狐 鬼佐渡坊	萬谷流 駒前若者	角館町 飾山囃子 手踊り会	義経千本桜の四の切である。 吉野山中の川連法眼の館に匿われている義経のところへ、家臣の佐藤忠信が訪ねてくる。母の看病で実家に戻っていたと言う忠信に、義経は伏見稲荷で別れた静御前の様子を聞くが、どうも要領を得ない様子。そこへ、静御前が忠信を供に到着したとの知らせが入る。怪しむ義経は二人の忠信のどちらが本物か、静に命じて確かめさせることにする。静が初音の鼓を打つと、忠信が現れ、鼓に聞き惚れる。怪しい様子に、静が問い質すと忠信は鼓の皮にされた夫婦狐の子で、親悲しさから人間に化けて静に付き添ってきたのだと白状する。それを聞いた義経は、肉親の縁薄いわが身と比べて狐を哀れに思つて鼓を与えることにする。狐忠信は喜び、鎌倉方に味方した僧たちが攻めてくることを知らせ、山へと帰っていく。	高橋一也 藤原隆志 藤原務	
12 菅沢	時今也桔梗旗揚 愛宕山の場 武智光秀 安田作兵衛	萬谷流 桜雅会	飾山囃子 弘道流奏秋会	大蛇丸によつて滅ぼされた名門の家の子・児雷也と綱手姫は、仙素道人に助けられ育てられる。道人は、児雷也には蝦蟇の術、綱手にはなめくじの術を受け、浪切の剣を探し出し、必ず二人で助け合つて親の仇をとるようにと話す。その後、児雷也は金持ちから金を奪い、貧しい者に分け与える義賊として名をはせる一方、大蛇丸に近づく計画をたてる。浪切の剣を求めて地獄谷へやってきた児雷也と綱手姫は、火炎渦巻く中、大蛇丸と戦うのであった。	戸澤真 平田貞博 上藤祐太	
13 桜美町	勢獅子音羽花籠 お祭り 鳶頭松吉 鳶頭梅吉	廿町 如月会	神代芸能保存会 藤原組	今日は祭礼の日。人々もいそいそと大層な賑わいぶり。 そこへほろ酔い気分の鳶頭がやって来て、あたりからは「待ってました」の声。「待っていたとはありがたい」と鳶頭は粋な踊りを始める。そこへ若い衆が打ちかかり、それをあしらひ、なおもお祭りの賑わいを楽しむ。	戸部史之 菊地豊 金谷貫慈 佐藤重明 龜谷渉	
14 西部	羅城門の鬼退治 渡辺源次綱 鬼茨木童子	文怜 秋月会	秋月会	時は、平安時代中期。大江山に住んでいる酒呑童子を源頼光と四天王の一人、渡辺源次綱は、噂を確かめるため羅城門へ向かう。しかし、誰もおらず、証を残すため札を打ち込む。するとそこへ若い女に化けた茨木童子が現れ、襲いかかってくる。綱手は茨木童子の片腕を切り落とす。茨木童子は、「七日以内に腕を取り返しに来る」と明言し、雲の中へ消える。 七日後、老婆に化けた茨木童子は現れ腕を取り返し、空へ去っていくのであった。	小松真徳 高橋光 草薨友彦 川村翔太 阿部龍哉	
15 下岩瀬町	勢獅子音羽花籠 お祭り 鳶頭松吉 鳶頭梅吉	廿町 如月会	神代芸能保存会 藤原組	今日は祭礼の日。人々もいそいそと大層な賑わいぶり。 そこへほろ酔い気分の鳶頭がやって来て、あたりからは「待ってました」の声。「待っていたとはありがたい」と鳶頭は粋な踊りを始める。そこへ若い衆が打ちかかり、それをあしらひ、なおもお祭りの賑わいを楽しむ。	島山博幸 島山勉 木元亮太 草薨伸	
16 岩瀬	小谷城虎口攻め 蜂須賀小六正勝 藤堂高虎	広目屋 祭喜会	祭喜会	織田信長と浅井長政の対立は、金ヶ崎合戦から始まった。きつかけは長政の離反といわれている。天正元年、小谷城の戦いは織田信長と浅井長政の間で行われた最後の戦いとなる。この戦いは浅井氏の滅亡のきつかけとなり、また、長政による援軍要請に呼応した朝倉氏を滅亡させる原因ともなった。 信長により総攻撃を命じられた木下秀吉率いる軍勢が、夜半に長政の拠る本丸と京極丸を占拠する足掛かりとなる弁形虎口突破時の一場面となる。	坂本純平 佐藤健 鈴木孝史 尾形祐平	
17 東部	蜘蛛の絲宿直斬 源頼光 女郎蜘蛛の精	萬谷流 東部若者	角館おやま囃子 弘道流 奏吟會	源頼光の館では病床につく頼光の看病と警護のために、家臣の坂田金時などが番を務めていた。館には次々と曲者が訪れ家臣達には不穏な気配に案じていた。そうしているうちに頼光の寢所に傾城薄雲の姿が現れ馴れ初めを語りはじめる。しかし頼光はその正体を見破り、手に持った名刀「膝丸」で斬りつける。本性を現した妖怪は、日本を魔界にすることを目論む女郎蜘蛛の精だつた。しぶとく抵抗する蜘蛛の精だが、頼光はじめ、渡邊綱など家臣たちの手により退治されるのであった。	菅原大樹 藤元忠善 田口雄介 山口隆一	
18 大塚	船弁慶 武蔵坊弁慶 平知盛の霊	大塚若者	角館飾山囃子 保存会	平家追討に功績をあげた義経であったが頼朝に疑念を持たれ鎌倉から追われる身となる。西国に逃れようとする津の大物浦に到着する。同行していた静御前は弁慶の進言もあり都に戻ることにする。そして、義経との再会を願いながら涙にくれて一行を見送る。 義経一行が出航すると突然、海が荒れ壇ノ浦で滅亡した平家一門の亡霊が姿を現す。平知盛の怨霊は義経を海に沈めようと長刀を振りかざし襲いかかってくる。義経は自ら刀を抜き、弁慶は祈禱し怨霊を退散させる。	工藤秀行 高橋徹 鈴木勝 黒澤淳	